

いわき湯本病院

症 例 概 要 患者：70歳代・男性

病名：パーキンソン症候群・右鎖骨遠位端骨折・中心性頸髄損傷（既往）

入院期間：令和5年6月下旬 ～ 令和5年8月下旬

経過：もともと当院外来でフォローしていた症例が歩行が困難になってきたことから引きこもり気味となり、転倒をきっかけに体動困難にて当院へ入院となりました。

入院後右鎖骨遠位端骨折も診断されリハビリも開始となるが、当初は無気力で、会話の成立も難しい状態でした。ご本人のちょっとした仕草から興味を持つものを推測し、信頼関係の構築に成功することができました。約2か月の入院でフリーハンドでの歩行が可能となり、目標であった自宅での入浴動作が可能。その後自宅退院となりました。

内 容

もともと当院外来でフォローしていましたが、令和3年11月～令和4年3月まで中心性頸髄損傷の診断により他院に入院していた症例です。上肢の筋力低下は残存しましたがフリーハンドでの歩行は可能となり自宅で生活していました。

徐々に運動機会が少なく引きこもりがちになり、令和5年6月上旬、外来受診時すくみ足が著明で歩行が不自由になっていたため、薬剤の調整を行っていましたが、改善は見られず、令和5年6月下旬の転倒をきっかけに体動困難にて当院へ救急搬送され入院となりました。入院後の検査で右鎖骨の骨折が診断されました。

入院直後は無気力で「何もしたくない」と話され表情も乏しい状態で、リハビリにも消極的でした。担当スタッフが様々な話題を提供し、ご本人の興味を示すものを探しましたがなかなか反応を表さずすぐに目を瞑ってしまい会話も続けられない状態でした。たまたま付いていたテレビで野球の映像を気にされていることに気づき会話をすると、それまでと異なり会話が成り立つことが出来ました。この件をきっかけに会話をしていただけるようになり、ご本人の考えていることがわかってきました。

周りに迷惑をかけたくないという気持ちから体の動きが思うようにならなくなってから部屋に引きこもるようになり余計に動けなくなっていったようでした。入院してからは「自宅に戻ってもどうせ迷惑をかけるから、このまま入院していたほうが家族のためになるのではないか」と考えていました。

大リーグの大谷選手の活躍が連日報道されており、ご本人も大谷選手の活躍を喜んでいたことで、

担当スタッフと大谷選手と一緒に応援するようになり、「俺も頑張らなくっちゃな」と前向きな発言が聞かれるようになりました。リハビリ開始時はすくみ足も著明で右鎖骨骨折のため左上肢でしか支持を行えないため、かなりいら立ちを感じておりましたが、7月半ばには薬剤の調整がうまくいき、すくみ足が減少してきました。

ご本人は入浴が好きで「できるだけ自宅で入浴したい」という希望も見られたため、浴槽への出入りの練習を実施していきました。環境が変わることですくみ足は再度著明にみられてしまいましたが、練習を重ねることで安定したまたぎ動作が可能となり、フリーハンドでの歩行および段差昇降が行えるようになり令和5年8月下旬に自宅へ退院となりました。

体が思うように動かなくなり家族に迷惑をかけないように何もしたくないという思いを持ってしまった患者さんでしたが、ご本人が興味を持つことを担当スタッフが共感し、ともに応援することで前向きとなり、目標であった自宅での入浴動作が可能となり無事自宅退院をすることが出来ました。